

自己愛的脆弱性と見捨てられ抑うつ・再確認傾向との関連

—質問紙調査及び対人葛藤を呈した事例での検討—

13003PCM 川上 紗季

I. 問題と目的

近年、青年は内面的な人間関係を避け、友人から低い評価を受けないように警戒し、互いに傷つけ合わないような円滑な関係を志向する傾向にある(岡田, 2007)。現代の青年は心理的安定を保つために表面的な関係を築いていると考えられる。本研究は「対人関係における心理的安定を保つ力の脆弱さ」に注目する。

II. 研究 1

1. 目的

現在、自己愛は誇大型と過敏型の2類型で考えられることが多く、日本では文化的な背景から、過敏型自己愛傾向の事例が多いと言われていた(福井, 1998)。自己愛的脆弱性とは“自己の価値や存在意義と関連した不安や傷つきを処理し、肯定的自己評価や心理的安定を維持する能力の脆弱性(上地・宮下, 2005, p. 83)”であり、“他者に承認・賞賛や特別の配慮を求め、期待した反応が返ってこない時に心理的に不安定になりやすい(上地・宮下, 2009, p. 283)”傾向がある。この傾向の強い者は他人に賞賛されたい欲求が強い反面、他者の評価に過度に敏感であり、他者に迎合的になり「人前に出ると自分がなくなる感覚」に苦しむことがある(小松, 2004)。その感覚を説明する概念として見捨てられ抑うつが挙げられ、佐々木(1998, p. 164)は“対人関係において体験する自己感そのものの喪失感”と定義した。この傾向が強いと、「相手の目に映る自分」を気にかけ、相手が望むような自分であろうと意識し続け、最終的に自分の存在価値を相手に確認するような行動をとると考えられる。このような確認を再確認傾向(reassurance seeking)という。自分は価値がある存在なのかを、重要他者に対して過度にしつこく確認を求めてしまう比較的安定した傾向である(Joiner 他, 1999)。そこで「自己愛的脆弱性の高い者は

見捨てられ抑うつが高い」(仮説 1)、「見捨てられ抑うつが高い者は再確認傾向が高い」(仮説 2)、直接的な影響を検討するため「自己愛的脆弱性が高い者は再確認傾向が高い」(仮説 3)という3つの仮説を検討することを目的とする。

2. 方法

調査対象者：私立 A 大学の学生 178 名を対象に質問紙調査を実施し、不備のある者を除き、計 168 名を分析対象とした(男性 33 名、女性 135 名、平均年齢 19.4 歳)。

調査手続き：2014 年 7 月 26 日に実施した。講義時間内に質問紙を一斉配布した。

質問紙構成：自己愛的脆弱性尺度短縮版(上地・宮下, 2009)、見捨てられ抑うつ尺度(佐々木, 1998)、改定版重要他者に対する再確認傾向尺度(勝谷, 2005)、フェイスシートから構成された。

3. 結果と考察

各下位尺度間の関連を見るため、強制投入法による重回帰分析を行った(図 1)。その結果、自己愛的脆弱性の 4 下位尺度のうち 3 下位尺度は見捨てられ抑うつに有意に正の影響を与え、仮説 1 は一部支持されたが、「自己緩和不全」のみ「見捨てられ感」、「親密さへの不安感」に負の影響を与えた。見捨てられ抑うつ の 3 下位尺度のうち 2 下位尺度は再確認傾向に有意に正の影響を与え、仮説 2 は一部支持されたが、「親密さへの不安感」の有意な影響はみられなかった。自己愛的脆弱性の 4 下位尺度のうち 2 下位尺度は再確認傾向に有意に正の影響を与え、仮説 3 は一部支持されたが、「自己緩和不全」と「自己顕示抑制」の有意な影響はみられなかった。他者からの注目欲求と「他者からの評価に対する不安」は共通して「見捨てられ感」を高めて間接的に再確認傾向を高める過程と、直接的に再確認傾向を高める過程があることが示された。また、「他者から見た自己」によって

心理的安定を保とうとしていることがわかった。また、自己愛的脆弱性の高い者は、「自分自身のなさ」から自己像を形成するのが困難であり、他者から理想自己を取り入れては、相手の反応を窺い、相手が認めてくれる自分でいようとすると考えられる。再確認行動は繰り返すことで抑うつが生じもしくは悪化することが報告されている(Joiner, 1999)。そのため、理想自己の取り入れと、自己の存在の確認行動、それに平行して見捨てられ不安をくり返し感じることで精神的不健康の悪循環に陥る可能性が示唆された。

「自己緩和不全」と「他者からの注目欲求」が影響を与えていた「親密さへの不安感」からは、再確認傾向への影響が見られなかったことから、情緒的に親密な関係を求めるよりも、不安を一時的に受け入れてくれる対象の維持に努めていることが示唆された。

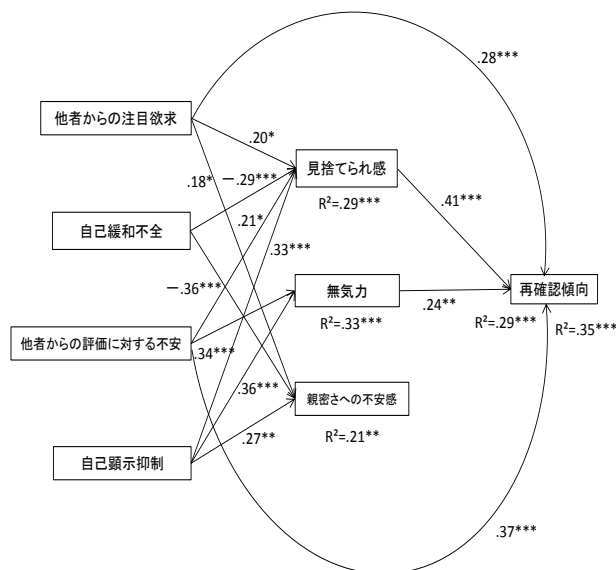


図 1.各下位尺度間の関連
注)*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Ⅲ. 研究 2

1. 目的

研究 1 は一般大学生を対象に行われたが、このことは臨床例の理解にも用いることができるのではないだろうか。接近と回避の葛藤を呈した事例を、自己愛的脆弱性と自己像形成の困難、見捨てられ抑うつ、面接者に対する再確認行動の視点から検討した。

2. 事例 A 31 歳 女性

主訴：「いろんなことを考えてしまい、不安になって身体に出てしまう性格を治したい」

家族：父・母・姉 2 人と暮らしている。目標としていた一番上の姉は過去にうつ病になり、自殺未遂をしたことがある。A は自分の家族について「世間体に縛られている」、「我慢をよいこととする」と表現した。

3. 面接過程

親や Th(セラピスト)に対して「自分を理解してくれない」と怒りを表出し続けた。面接室以外での洞察や症状への理解を話し、Th と A の関係性からは露骨に目を逸らし続けた。小さい頃の写真や趣味に溢れた自室の写真などを持ち込み、自分の存在価値を Th に確認しているかのような行動が続いた。A が他の人に対して抱いている距離感の迷いを Th にも抱いていることを指摘したが曖昧にされた。怒りを表出している自分を見放さないでほしい、とすがりやうなやりとりが続いた。

4. 考察

A の他者からの注目、評価に敏感である点や、不安を自分で処理する能力の低さから自己愛的脆弱性という視点での検討は可能と考えられた。また、自分が対人関係において未熟である原因は母親や姉にある、と怒りを示した。しかし直後には、「それでも自分を理解してほしい」、「甘えたいのに甘えられない」と見捨てられることへの怖れと屈折した甘えを表出した。また、自己にまつわる物を面接に持ち込み、Th に見せては反応を窺うという、非言語的な再確認行動も見られ、#8 では Th に自分への質問を求めるといったより直接的なものとなった。A は真の情緒的な交流を求めているのではなく、不安を吐き出す対象を探し、心理的安定を保つためにその対象の維持に努めているようだった。これは研究 1 の考察と一致するものであった。

Ⅳ. 総合考察

一般大学生と臨床例のどちらも共通して、自己愛的脆弱性が強い傾向にある者は、心理的安定を保つために目の前の関係性から目を逸らし、一方で、抱えきれない不安を受けとめてくれる対象を強く求める傾向にあることがわかった。